

時事会計 No. 43

秩序ある市場主義をめぐる ー市場と倫理ー

キーワード: 公正価値、秩序なき市場、倫理、信頼、ケネス・アロー、都留重人、アマルティア・セン、ムハマド・ユヌス、マックス・ウェーバー、エンゲージド・ブディズム、ウォーラースティン

関連記事: 『朝日新聞』08年6月7日、11月29日、09年2月24日、『日本経済新聞』09年5月2日。

前々回のNo. 41「日米欧の時価会計『凍結』をめぐる」では、公正価値 (fair value) と秩序ある市場主義に触れたが、今回はその秩序ある市場に関連して、市場と「倫理」についていくつかの観点からみてみたい¹。

市場と倫理ー「制度」としての倫理

あらゆるものを商品化する市場主義が席卷している今日、倫理、とりわけ市場とのかかわりで倫理を考えることが重要だ。

この点で、30年余りも前になるが、大学院生の時代に読んだある1冊の本が思い出される。ケネス・J・アロー／村上泰亮訳『組織の限界』(岩波書店、1976年)である。この本は、それまでの伝統的な組織理論に新しい分析の光をあてたものだが、当時、非常に新鮮な驚きをもって読んだことを覚えている。今でも読み返してみると、その新鮮さは失われていない。とりわけ市場と組織(市場の失敗領域で集団活動の利益を達成する手段の総称)との関係はむろんだが、人々の中の「信頼」を市場で買えない財(用役)ととらえる視点は重要に思える。

さらに、アローは信頼関係の基礎にある意識的・無意識的な「倫理」や「道徳」を市場システムの欠陥をカバーする一種の制度(組織)と見ている。すなわち、「政府や企業以外にも、数多くのさまざまな組織がある。しかしそれらのすべては、…非市場的方法による資源配分を必要とするという共通の特徴を持っている。その上にさらにもう一組の制度がある。あるいは制度という言い方は適切でないかもしれないが、私としては、読者の注意を喚起し、大いに重視して考えたい。それは目に見えない制度であって、実は、倫理や道徳の原則である」(21頁、傍点は引用者)と。

今日、市場原理があらゆる領域に深く浸透している。しかし、人々の「信頼」という外部性をもつ「財」は、市場にとって極めて重要であるにもかかわらず、市場原理一辺倒のもと遙か彼方に押しやられている。資本市場をみても、むき出しの市場主義に法規制も後追いになっている。よく知られるように、資本主義の精神としてプロテスタントの勤勉と質素(「世俗的禁欲」の倫理ー後述)があげられるが、それとはまさに正反対の体をなしている。

¹ 本トピックスはもともと前々回の付論という位置づけであったが、幾分長くなったので単独の扱いにした。

今日の金融危機にあつて「秩序ある市場主義」というなら、上記のアローの視点は極めて重要だ。とりわけ、信頼関係を維持する倫理の存在が重要だ。会計・監査が資本市場のインフラであるなら、倫理はさらに目に見えない、それ故に極めて重要なインフラといえる。

市場には心がない

市場と倫理に関連して、いくつかの議論に触れておこう。最初は公害の政治経済学を提唱した経済学者都留重人である²。

その最後の単著になった『市場には心がない』(岩波書店、2006年)には都留の最後のメッセージが込められているが³、そのなかでいみじくも『心がない』と言うけれど、市場の参加者にはしばしば邪心がある(3ページ、傍点は引用者)と述べているのは、きわめて今日的だ(「市場には心がない」と言ったのはポール・サムエルソン)。ちなみに、そのなかで触れられている「健全な市場化」(松原隆一郎)、「品格のある市場経済」(宮崎勇)、「まともな市場経済」(佐和隆光)も、また「秩序なき市場主義」に通じている。

次は、インドの経済学者のアマルティア・センである。経済問題の倫理的側面を重視した理論がノーベル経済学賞(1998年)を受賞したが、(それまでの経済学賞と異なって)その意義はきわめて大きいものがある。センは高等数学にもたけているが、いわゆる社会的効用関数の議論に関して、「形式における数学的厳密性と内容における驚くべき不正確さとが、相伴って進行してきたのである」と述べているが、そこにはセンの研究スタンスの一端がよくあらわれている⁴。

ここでは、特に市場と倫理に関連して、朝日新聞のインタビューのなかで次のように述べている点を紹介しておこう。すなわち、「市場経済体制はいくつもの仕組みによって動いている。市場はその1つに過ぎない。なのに市場の利用だけを考え、国家や個人の倫理観の果たす役割を否定するなら、新自由主義は人を失望させる非生産的な考え方だということになる」と(『朝日新聞』09年2月24日、傍点は引用者)。

さらにもう1人、インド隣国バングラデシュ出身のムハマド・ユヌスに触れておこう。

² ちなみに、日本経済新聞の「私の履歴書」の執筆リストに都留重人は登場していない。この人こそその自叙伝(自分史)をどう記すか、それを見てみたくなる。なお、「私の履歴書」には経済学者も登場するが、いただけないのはエリートの自慢話し(勲章ものなど)だ。老人には自慢癖があるというが、むしろ失敗談などの方が(のちに名声を得ただけに)読んでいて気持ちがいい。その点で、例えば作曲家遠藤実の「私の履歴書」(06年6月)などは、その生き様に大きな勇気と感動を覚える。経済学者の履歴書にはそのような勇気と感動を与えるものが少ない。都留重人の「私の履歴書」があればと思うゆえんだ。

³ 著者の都留は日常の時事問題に関心を寄せて、いわゆる「5年もの」(時事問題の所感を5年ごとにまとめる)を刊行しているが、それを90歳を超えても持続していることには驚嘆の思いがする(この著作はその最後の刊行となった)。ちなみに、筆者が都留を知ったのはもう40年ほど前になるが、学部時代に読んだスウィージの翻訳書(『資本主義発展の理論』)であった。

⁴ 『福祉の経済学』(鈴木訳、岩波書店、1988年)44ページ。拙著『情報評価の基礎理論』(中央経済社、1988年)第10章補論4「分配の公正とゲーム理論」では、何が平等か、何が公正かに関する社会的順序づけの議論をしているが(特に285-86ページ)、そこでの『不平等の経済学』(杉山訳、日本経済新聞社、1977年)など、いくつかのセンの引用も参照されたい。

ユヌスはノーベル平和賞(2006年)で有名だが経済学者でもある。マイクロファイナンスやソーシャルビジネスで有名だが⁵、日本経済新聞のインタビューで「人間は本来、利己的な部分と『無私』の部分の併せ持つ多面的な生き物だ。ただ、これまで『無私』が経済に組み込まれることはなかった。私の提案はこの『無私』に基づいたビジネスを創造し、資本主義に取り入れることでゆがみを正し、完成形を作り上げようというものだ」(『日本経済新聞』09年5月2日)と述べているのが、きわめて印象的だ。まさに市場と倫理の実践化がここに見られる。

ちなみに、その自伝『ムハマド・ユヌス自伝』(猪熊訳、早川書房、1998年)では、「経済学者の誤り」についての叙述があるが、その一節だけ紹介しておこう。すなわち、「彼らが(経済学者—引用者)何年もかかって構築してきたエレガントな経済理論は、現在の経済を作り上げた力を理解するには役立ったが、それは貧しい人々を最初から除外し、社会的良心など微塵もないままに貧困緩和の課題を見捨てたにすぎない」と(302ページ)⁶。

ともかくも、先のセンの「倫理」とあわせると、彼らの理論と実践の基礎に、インド的な“風土”に根ざした精神性(かつて日本にも存在していたが)を感じるのは私一人ではないだろう。

資本主義の精神—「世俗的禁欲」の倫理

ここで、よく知られた古典『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(マックス・ウェーバー)にも触れておかなければならない。そこでの「資本主義の精神」の「精神」がいかなるものか、これが重要になる。この点は訳者の大塚委久雄の解説に詳しいので参照されたいが、要するに世俗そのものの中における「世俗的禁欲」とか「行動的禁欲」と言われるもので、これが近代の資本主義を生み出した「エートス」(倫理的雰囲気)だとウェーバーは言うわけである⁷。

しかし、近年の世界金融危機の根っ子には、前々回のNo.41「日米欧の時価会計『凍結』をめぐって」でもみたように、それとは対極にある貪欲な資本主義(greed capitalism)が指摘されている。資本主義を生み出したその「精神」とはおよそかけ離れた現代の資本主義の精神が見えてくるわけだ。

この点で、ここでは特にその本の最後の幾分予言めいた箇所を引用しておこう。すなわち「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、(中略)この巨大な発展が終わるとき、まったく新しい予言者たちが現れるのか、あるいはかつての思想

⁵ 拙稿「続 社会のなかの会計」(『駒澤大学経済学部研究紀要第64号』、2009年3月)のトピック1「大手銀行3兆円の市場最高益」では、愛される銀行になれるかという点で、このマイクロファイナンスに触れている。

⁶ ここでもう1つ、筆者の気に入っている一節を紹介すれば、「就職の時に有利になるように若いうちから一生懸命勉強する考え方には、私はとても嫌悪感を感じる」(301ページ)である。

⁷ ちなみに、「行動的禁欲」については次のように解説されている。「…他のあらゆることを忘れ、褒美を得んものただゴールを目がけてひたすら走り走る。つまり、あらゆる他のことがらへの欲望はすべて抑えてしまって——だから禁欲です——そのエネルギーのすべてを目標達成のために注ぎ込む、こういう行動様式が行動的禁欲なのです」(岩波新書、400-401ページ)。

や理想の力強い復活が起こるのか、それとも——そのどちらでもなくて——一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰も分からない」(岩波新書 366 ページ、傍点は引用者)と。ここでの「思想や理想の力強い復活」には、先のセンやユヌスの「思想・精神」が想起される。

さらには、「こうした文化発展の最後に現れる『未来人たち』にとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。『精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう』と」(366 ページ、傍点は引用者)。ここでは、今回の金融危機とのかかわりで、とりわけ「精神のない専門人」という点が重要だ⁸。

(ここに『日本経済新聞』09年5月2日を入れる)

エンゲージド・ブディズム

ウェーバーは近代資本主義の精神をキリスト教の精神に見出したわけだが、先のセンとユヌスの精神、とりわけユヌスの「無私」は仏教の思想や精神(例えば慈悲)に通じているといえる。となると、現実の社会経済問題に仏教はどうかかわるか、これが問われそう

だ。
この点で、1960年代以降特に欧米で反戦など社会問題にかかわる仏教のあり方が注目される。それは、エンゲージド・ブディズム(Engaged Buddhism、社会参加仏教、行動する仏教: engagedには運動とか活動の意味がある)と呼ばれる仏教のあり方である。善光寺がチベット騒乱を受けて北京オリンピックの聖火リレーを辞退したのは記憶に新しいが、これもそうした仏教のあり方として報じられた(『朝日新聞』08年6月7日)。

(ここに『朝日新聞』08年6月7日を入れる)

自己の内面だけを見つめる僧侶ではなく(禁欲的修行)、世俗(社会)の問題に積極的にかかわるといって「行動する仏教」とも呼ばれるが、先のウェーバーの「世俗的禁欲」や「行動的禁欲」と通じる点もある⁹。昨年11月、東京で世界仏教徒会議が開かれたが、その宣言文に社会参加への具体的な行動を起こすことが盛り込まれた(『朝日新聞』08年11月29日)。日本の仏教界にもエンゲージド・ブディズムの波が押し寄せているといえる。

ちなみに、筆者の所属する駒澤大学には「仏教経済研究所」というものがある。まだメンバーではないが、その公開シンポジウム(第6回「いま仏教に望まれるもの」09年3月)に参加した。これまでのシンポジウムには「世界平和にどう貢献するか」(第3回)、「日本仏教の現状と課題」(第4回)、「仏教者の社会的実践」(第5回)といったテーマが掲げら

⁸ この点は、拙著『変わる社会、変わる会計』(日本評論社、2006年)92-93頁の「テクニクからエシックスへ」で触れている。

⁹ ちなみに末木教授(仏教学)は、こうしたあり方はカトリック司祭が貧困や人権の問題に立ち上がった中南米の「解放の神学」の刺激もあると述べている。

れている¹⁰。要するに、この研究所もまた、社会経済問題と仏教のあり方を問うている。

先にセンとユヌスの「精神」に触れたが、こうしたいわば「アジアの精神」は、先に引用した「思想や理想の力強い復活」と言えるかもしれない。

史的システムとしての会計—進歩は必然でない

最後に、会計の史的相対の視点に触れておこう。先の都留重人は、別の著書で「私は、かねてから、社会的剰余（サープラス）の形態が経済体制を質的に特徴付ける識別範疇である、という考え方を抱いてきた。たとえば資本制社会では、サープラスは私的資本に帰属する利潤という形態をとるとみるわけだが、だとすれば、日本資本主義の生成・発展・変革の歴史的過程で、どのようなサープラスの形態変化が生じたか、また生じる可能性があるかということについて、私は関心をもってきた」（傍点は引用者）と述べている¹¹。サープラスの形態変化は、サープラスを対象にする会計の形態変化につながるだけに、ここが大切なところといえる。端的に、サープラスの形態変化と会計のあり方である¹²。今存在しているものが確かなものでも、すべてでもない。存在するものは、すべて変化していく。

また、幾分大きな話になるが、史的システムとしての資本主義の相対性を説いたウォーラースティンは、「千年前に比べれば、今日の世界が自由や平等や友愛に満ちているのは自明のことだなどは、とうてい言うことができない。むしろ、事実はその正反対だといふべきだろう」と述べている¹³。

そこでの「友愛」ということに着目すると、現代の会計はそれとは対極にある、いわば「不信」から出てきているといえる。そして、その基礎に史的システムとしての資本主義が存在するのであれば、「自由や平等や友愛に満ちている」世界には、それにふさわしい会計システムが存在することになる。

先の都留重人の話と重なるといえるが、少なくとも言えることは、そうした現在とは異なる社会システムを基礎にした別の会計を想定することが、歴史的に今存在するところの（不信に根ざした）会計を相対化することにつながる。ここに、史的システムとしての会計というとらえ方の意義がある。

大切なことは、まさにウォーラースティンがいうように「進歩は必然ではない」ということ、そしてそれは努力してこそ生み出されるものである、ということである。

(09年5月10日)

¹⁰ 第4回公開シンポジウム「日本仏教の現状と課題—社会に開かれた仏教をめざして—」（『仏教経済研究』第37巻、2008年5月）での基調講演（末木教授）では、日本における社会参加の「社会」をめぐって突っ込んだ論議がなされている（「市民社会」など国家と区別される「公共性」領域の日本における問題と課題）。

¹¹ 都留重人『体制変革の政治経済学』（新評論、1983年）まえがき。その歴史的分析は第2章、第7章参照。

¹² この点は、拙著『変貌する現代会計』（日本評論社、2008年）220-23ページ「誰のための会計にするか」参照。

¹³ ウォーラースティン・川北稔訳『史的システムとしての資本主義』（岩波書店、1985年）146ページ。詳しくは、拙稿「時価会計と資本利益計算の変容（下）—社会科学としての時価会計—」（『経営研究』第53巻第3号、2002年11月）46ページ参照。